

ことばだより



イラスト：おがわなみ

目次

巻頭随筆 聴くことから始めよう	山根基世	2
国語		
特集 「交流」を効果的に授業に取り入れる		
「交流」を活性化する	今村久二	3
交流活動を取り入れた実践例	岡崎智子	6
文学教材の舞台		
古典芸能の舞台をめぐる		8
書写		
二色筆の作り方		12
漢字コラム 「谷」という漢字から見いだせること	笹原宏之	14
資料室		15

聴くことから始めよう

山根 基世 アナウンサー



定年退職後、子どもの言葉を育てる活動に入って六年が過ぎた。子どもたちと直接話をする機会が増えたこの頃、ふいに自分自身の幼い頃の記憶がよみがえってくることもある。

あれは四才くらいの時だったと思う。誰か女性客が訪ねてきてわが家の玄関の土間に立ち、母は土間に面した座敷に正座し、その傍らで私は母の肩に手をかけて立っていた。客は、お礼を述べながら菓子折のような紙包みを母の前に置いた。母は、そんなお気づかいなく……などと云ったのかどうか。大人の女性二人の会話が続く中、私は、その紙包みをズズーツ、ズズーツと足で、客の方へ押し返したのである。

客が帰ったあと、私はこっぴどく母に叱られた。あんな行儀の悪いことをするとはなにごとだ、客に対して失礼ではないか……その時の言葉は覚えていないが、眉をつり上げた母の金切り声は耳に残っている。その時の自分の心の動きを、今でも私はありありと思いつくことができる。四才なりに私は考えていたのだ。大人の言葉で言えば「そんなお心づかいはいりませんよ、こんな品をいただくのは申し訳ない、どうぞお持ち帰りください」というようなことを。言葉で言い表すことができないから、足で「ズズーツ」という表現になったのだ。母に叱られた時、叱られるのは当然だとわかつてはいたが、私はとても悲しかった、寂しかった。本当は心の中でそう思っていたのにと。しかし一言の言い訳も言えないまま、この事件は私の心の底に沈んでいた。

今年の初めから私は、新美南吉の生誕百年記念行事の一環として、その出身地、愛知県半田市で小学二年から七十才までの異年齢の人々が一緒に南吉の『ごんぎつね』を読むというプロジェクトをスタート

させている。毎月二回の勉強会で読みこんでいくと、子どもたちが意外に鋭いことを指摘してくる。兵十のことを「赤いさつまいもみたいな元気のいい顔」と書いてあるが、「さつまいもって細長いでしょ、兵十は丸い顔だと思うのに、どうしてさつまいもにしたのかな」。最後に兵十がごんを撃ったあと、くりをくれたのがごんだと気づき、「火なわじゅうをばたりと、とり落としました」とある。「この時の音はなぜ『ばたり』なんだろう、『ガチャン』じゃダメ。土間だったから土の上に落とす音なんだ」等々。子どもの頭の中を侮ってはならないと思いついた。その時、あの幼い日の事件がぼっかり浮かび上がったのだ。

子どもの言葉を育てるうえで、私が最初の目標にしているのは「自分の気持ちを言葉で表現でき、相手の言葉を聞いてその心を理解できること」だが、あの時、母が「どうしてあんなことをしたの」と優しく聞いてくれたら、私は自分の気持ちを言葉で説明できたであろうか。まだ無理だったかもしれない。しかし、まずは子どもの言うことをじっくり「聴く」ことから始めなければならないと思うのだ。

やまね もとよ ことばの杜代表。元NHKアナウンサー室長。一九七一年早稲田大学文学部卒、NHK入局。ニュース番組、旅番組、働く女性向け番組、美術番組などを担当。著書『ことばで「私」を育てる』（講談社）他多数。

「交流」を効果的に授業に取り入れる

「交流」を活性化する



秀明大学教授

今村 久二
いまむら ひさじ

江戸川区・文京区の小学校で教鞭を執り、三鷹市教育委員会指導室長や東京都教育庁指導部主任指導主事を経て、平成十四年に東京都品川区立品川小学校校長に。著書に「文を書きたくなることは遊び」（東洋館出版）などがある。

前回の学習指導要領から「伝え合う力を高める」という文言が国語科の教科目標に位置づいて、いわゆるコミュニケーション力を研究の中心に据えた研究校が多くなった。

一方、今次の学習指導要領において、この教科目標を達成するために、各領域で言語活動例を示し、指導事項に「交流」系列が新設された。「交流」については、これまでも授業の中で話し合いなどを「活動」として取り入れてきた実績をもとに、その活性化を図るため、「伝え合い」を研究テーマにする学校も増えてきている。

それらの多くが、「話すこと・聞くこと」

の領域から指導のあり方を探ろうとし、その活動の形態を思考したり習得したりすることの研究の方法論としている。また、話型や態度などを指導事項として、全校で型の習得を徹底することからコミュニケーション能力を育てようとする傾向がある。

だが、「わたしは、……」と思います。そのわけは……」のような話型の習得が、子どもたちの学習のコミュニケーションを活性化するわけではない。むしろ、活性化されたコミュニケーションの中から話型などが醸成されていくと考えるべきである。つまり、「話すこと・聞くこと」領域の指導は、「交流」の活動に優先しない。

学習指導要領の「各学年の目標及び内容の系統表」（『小学校学習指導要領解説 国語編』付録参照）においても、「交流」は「書くこと」と「読むこと」に位置づけられている。

○「書くこと」における系列名

「交流」に関する事項

○「読むこと」における系列名

「自分の考えの形成及び交流」に関する事項

なぜ、今「交流」か？

これまでも、効果的な授業の展開を目ざして、バズセッションやグループの話し合いなど、「活動」として取り上げられてきた「交流」が、「指導事項」として取り上げられたことの意味は何か。

「言語活動の重視」を含め、その背景には、新しい学力観の中心をなす「生きる力」があり、その底流にはOECDの示すキー・コンピテンシーがある。つまり、二十一世紀を生きる人間に必要な能力として、「個」や「民族」などを超えた「人類」としての持続可能な発展への課題がある。

一般的に、「コミュニケーション能力」は社会生活における人間関係を円滑にする、意思の伝達や受容の技術と捉えられている。ビジネス書のハウツー本として出版されることが多い。

しかし、OECDの「キー・コンピテンシー」における〈言語・知識・情報などのツールを相互作用的に活用する能力〉および〈人間関係を構築し、協調して、対立を御し解決する能力〉、〈権利・利害・ニーズなどを表明し自律的に行動する能力〉は、これからの「コミュニケーション」に必要な重要な能力を表

している。つまり、誰もが自分の立場や思いを表明し、多様な（人類として、という視点も含め）人間関係を構築し、言語や情報などをツールとして互いに活用し合うことのできる力をコミュニケーション能力と捉えるべきである。

つまり、指導事項としての「交流」の目的には、基底となる《人間関係（仲よし）コミュニケーション》にとどまるのではなく、相互に言語や知識・情報を活用しながら思考を練り上げ、協力的な知識・情報を拓き、高次の人間関係を築いていくコミュニケーション《知的コミュニケーション》能力が期待されているのである。

学びを広げる「交流」

こうした期待されるコミュニケーション能力以上に本質的な、学習理論の研究もある。その基底となったヴィゴツキーの「最近接発達領域」は、その後、ブラウンなどによる「相互教授法」（一九八四年）の提唱を生んだ。詳述するスペースはないが、ヴィゴツキーの「最近接発達領域」とは次のようなものである。

学習者が一人でできるレベルと、教師や仲間を支えられてできるレベルとの間に、他人との関わり合いから発達するという領域がある。

「他人との関わり合い」から発達する学びを「交流」の側面から概観すると、そこには、大きく三つのステップがあると思われる。

○自分と共通の経験・知識をもつ他者と共感したり共通理解できることによつて安心感が生じ、それによつて自分の思考が強化される。

○自分と異なる経験や知識をもつ他者との関わり合い・交流によつて思考が広がる。

○他者からの質問や意見・批評・批判などが、自分の思考を反省的に吟味させる。

このような、知的な発達を軸にすると、「交流」は、まさに、今求められている「思考力・判断力・表現力」の育成に欠くことのできない、学びを広げる指導事項なのである。

《人間関係コミュニケーション》から《知的コミュニケーション》へ

「交流」を活性化するには、学級経営・教科経営の観点から、基底となる人間関係づくりのコミュニケーションづくりが大前提である。「肯定的に聞いてもらえる」「まちがっても笑われない」「応援の気持ちで聞く」などが集団の雰囲気として形成されていることが

大切である。相互の情報や成果のやりとりが、リラックスしたフラットな雰囲気で開催していく学級づくりを目指したい。

そのためには、自然なコミュニケーションの中で認め合いが育ち、集団への寄与が評価（相互・自己）の基本となる必要がある。つまり、「話す」ことと同様に、あるいはそれ以上に「聞く」ことが、「寄与」として重視される必要がある。

したがって、学びの交流を活性化するためには、次のような順序を基本に授業を進めたい。

①対論で盛り上げようとするのではなく、まず、「同じ考え」を拾い、安心感をもたせる。

②賛同しつつ、つけたすという発言に広げ、思考の強化を図る。

③質問などで異論を取り上げ、視野を広げたり視点を変えたりする。

④自分の考えの深化や変容を肯定的に意識させ、交流のよさを実感させる。

⑤特に、「○○さんがうなずきながら聞いてくれたから安心して話せた」などの、「聞くこと」の《交流への寄与》を振り返りの重要な観点として意識させる。

これらのステップとしての「交流」を活性化するために、指導事項としての「交流」を活性化するために、次のような点を意識したい。

○「交流」自体に「目標」があり、「評価」があること。

○したがって、「話し合い」で単に「授業が盛り上がった」という結果ではなく、個々の児童に目標の達成・成就感などの成果があること。

○「話し合っただけではなく、内容の深化とともに、「認め合い」「高め合い」が意識され、「交流」自体の効果や必要性が話し合いの成果として、学ばれていくこと。

つまり、「交流」が必要なもの、不可欠なものとして意識され、共同（グループ）で追究することが自分のためであり、自分が追究することが共同（グループ）のためであるという意識が共有されることが大切である。

指導事項「交流」を授業化する

例えば、前項の①を意識した交流では、「情景や心情を想像する（手がかりとなる言葉）」を見つけたら、それをカードなどに書き出し、全員自由に歩いて「同じ言葉」を見つけた友達を見つけ、次々に対話していく。「最低三人とお話ししてこよう」というようなめあてで相手を探させ、対話を深めるなどの活動を取り入れたい。（同じ）を優先して、思

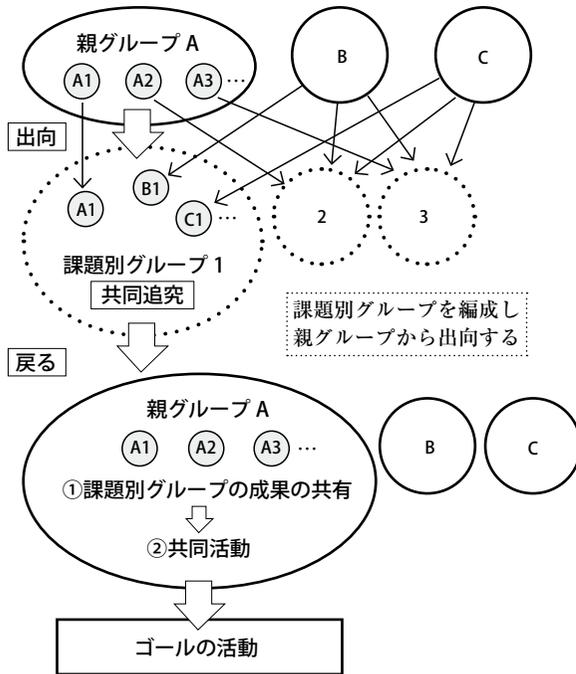
考の強化を図るのである。私はこのような交流形態を「スクランブル交流」と呼んでいる。

さらに、指導事項の「交流」を目的として活動させるためには、多様な必然性のある形態が設計されるべきであり、交流による成就感が重要である。通常の多様な交流による高め合いや深め合いの経験を基底にして、さらに「交流」を目的として意図的に学習展開の軸にする単元などを開発したい。

紙面がないので一例をあげる。本稿に続く岡崎教諭の実践例と対照しながら理解してほしい。

共通の目的をもたせた「出向学習」の例

一般に定着したメソッド名ではないが、親グループの発表形態などの方針にそって、課題を分担し、各親グループからの分担者どうしが調査などの共通目的別のグループを形成（出向）し、学習する方式である。親グループでの分担の話し合い、出向先グループでの共同追究の話し合いや活動、親グループに戻っての経過や成果の報告、発表準備のための話し合いなど、多様で、メンバー全員に責任が生じる学習形態である。左図を参照されたい。



- 親グループで学習課題の追究方法、ゴールの活動を話し合う。
- 課題を分担する。

- 同じ課題を分担した各グループの担当が集まり、課題別グループを編成する。
- 課題別グループで共同追究を展開する。
- 課題別グループで成果を共有する。

- 課題別グループの成果を親グループにもち帰る。
- 各課題について、担当の報告会を開く。
- ゴールの活動に向け、個別・共同の準備を進める。
- ゴールの活動へ。

※○は課題別グループでの活動、●は親グループでの活動を表す。

交流活動を取り入れた実践例



東京都新宿区立
戸山小学校主任教諭
おかざき ともこ

岡崎 智子

三年生にツルレイシ（ニガウリ）の種をプレゼントしよう

教材について

本校では、例年、理科で育てているツルレイシの種を翌年の学習に生かせるように、次年度の三年生に引き継いでいる。本単元では、その時に種を入れるパッケージ作りをグループごとに行い、その過程を通して、話し合う力を高めることをねらいとした。出向学習の形態をとり、児童一人一人が自分の役割を実感し、必然性のある交流活動を行うことを目指した。

児童は、親グループと出向先との二グループに所属する。親グループでのパッケージ作りを成功させるためには、出向先のグループでしっかりと学んで、成果をもち帰らなければならぬ。二つのグループで活動する中で、交流の力を育てることができると考えた。

単元の目標

○相手を意識し、理由や事例をあげて具体的に

に話す。A(1)イ

○互いの考えの共通点や相違点を考えながら話し合う。A(1)オ

学習計画（全8時間）

- ①学習計画を立て、各自の担当を決める。
- ②企画会議（親グループ）で、三年生に伝えたいことを話し合う。**親**
- ③担当者会議（出向先）でそれぞれの担当する部分について役割や特徴を考え、理解を深める。**出**
- ④担当者会議で、アイデアを出し合う。**出**
- ⑤企画会議で担当者会議の内容を報告し、パッケージデザイナーの候補を選ぶ。**親**
- ⑥担当者会議でそれぞれの候補を報告・調整後、企画会議でパッケージデザインを決定する。**出↓親**
- ⑦パッケージを制作する。**親**
- ⑧新作発表会を行い、作品を紹介し合う。**課外** 三年生にプレゼントする。

指導の実践

第一時 ツルレイシの種を三年生に届けるという話題で、学級全体で話し合った。「もらってドキドキするような袋に入れて渡し、育ててみたいと思ってもらいたい」という意見が出た。そこで、見た時にわくわくするような袋を作り、それに種を入れて三年生にプレゼントしようというゴールを設定し、児童とと

もに学習計画を立てた。

グループごとに会社を設立し、種を入れるパッケージを制作する。この会社が、児童が属する親グループ（五人組）である。会社の名前をつけ、メンバー表を作成して親グループへの所属意識を高めるようにした。

会社の中で、商品名・キャッチコピー・ツルレイシを使った料理のレシピ・デザイン・豆知識の五つの役割を一人一役で分担した。

第二時 親グループのめあてを作り出す交流

企画会議（親グループ）で、三年生にどのようなことを伝えるパッケージにしたいかを話し合う。ツルレイシのことを調べ、情報ボードを作成し、それを見ながら話し合った。

会社のめあてを決める会議なので、初めに、互いの意見をよく聞き、共通点や相違点を探しながら話し合うことを確認した。「無駄がないということ伝えたい」「よさがたくさんあることを伝えたい」などのめあてが決まった。

第三時 共同の課題に向かって助け合いながら学習を進める交流

一回めの担当者会議（出向先）である。各会社の代表ということで、児童は意気揚々と参加していた。どのグループも、実際にある商品のパッケージを見ながら、自分たちが担当するのはどのようなものか、どんな効果があるのかなどを考えることから会議が始まった。

会社（親グループ）から来ているのは自分

一人という状況から、自然と一人一人が真剣に取り組み、友達どうしで確かめ合いながら進めていた。

第四時 アイデアを出し合い、よりよいものを作り上げる交流

二回めの担当者会議（出向先）である。前で学んだことをもとに、アイデアを出し合い、適否や改良点などを話し合ったあと、アイデアボードに案を書きためる。

最初に、以前の会議の音声聞かせ、話し合いの仕方を振り返った。「発言を受け止めるあいづちを打ってもらうと安心する」「理由を尋ねることで友達の考えを引き出せる」などの言葉が児童から出された。これらを意識すると上手に話し合えることを全員で確認し、会議を開始した。

第五時 出向先で考えたアイデアを親グループにもち帰り、報告する交流

二回めの企画会議（親グループ）である。担当者会議の内容報告を受けて、会社のパッケージに使いたいものの候補を選ぶ。

担当者は、自分たちが考えたことを正確に伝えることが、その他のメンバーは、正しく聞き取り、判断の材料にすることが求められる。

今回は会社としての案を選ぶ。友達の見解につなげて話したり、相違を考えたり、発言のない人に尋ねたりすることで、全員の意見を引き出し、話し合うことができると確認した。話し合いを進める際に役立つ言葉を集め、

手引き（便利な言葉集）として示した。

児童は、出向先での成果を披露するので、どことなく誇らしげに話していた。ふだん、なかなか話し合いで発言をしない児童も、アイデアボードを活用し、自分の担当内容を報告したのを境に発言回数が増え、積極的に話し合いに参加することができた。出向先のみなで考えたという安心感や、自分の報告を友達が開き、それをもとに話し合いが進んだことが、自信につながったのであろう。

第六時 調整、改良するための交流

三回めの担当者会議（出向先）を行い、決まった候補を発表し合う。アドバイスをしたり、候補が重複した際の調整を行ったりして、会社ごとの最終デザインを決定する。その後、担当者は会社に戻り、企画会議（親グループ）で報告した。

第七時 パッケージ作りの作業に伴う交流

決定した案をもとにパッケージを制作する。出向経験を経て、担当する部分に責任や誇りを持ち、全員が熱心に制作に取り組んだ。完成すると「やった」などの歓声があがり、共同で作上げた達成感を味わっていた。

第八時 新作パッケージ発表会で作品を発表し合う。考えたアイデアが実際の形になったことで話し合うことのよさを実感していた。

実践での留意点

本実践では、特に以下の五点に留意した。

- ① 児童にとって魅力的な課題を設定する。
 - ② 会社（親グループ）への所属意識を高める。
 - ③ 話し合いの目的を確認してから会議を始める。
 - ④ 出向先で活動する時に、グループごとの学習の手引きを作成する。
 - ⑤ 活動報告や話し合いの補助となる資料（情報ボード・アイデアボード・便利な言葉集）を作成する。
- 目的意識や相手意識を明確にすること、自分の属する親グループのためにがんばりたいという意欲を高めること、どんな子も自信をもって参加できるように、手引きや資料を作成すること、これらを意識することで、児童一人一人にとって効果的な交流となる。

終わりに

単元前には、自分の意見を主張し合うだけに近かった話し合いが、単元終了後には、相手の意見を「聞く」、それに対して考えを述べ合うというように変化した。また、自分の意見を理解してもらおうと、例示をしたり、言いかえたりしながら話す姿も見られるようになった。単元を通して、「相手を意識して具体的に伝える」「互いの意見を統合して新しい考えを生み出す」といった交流の力が少しずつ高まってきたことがわかる。

出向学習の形態をとった結果、一人一人の学習への意欲や自信が確実に高まった。また、互いの存在を認め合うこともでき、出向学習はさまざまな面で有効であると感じた。

寄席公演で、上席（毎月一〜一〇日）、中席（同一一〜二〇日）の十日ごとに出演者と演目が入れ替わります。一般二〇〇〇円、小学生一〇〇〇円という比較的安めの料金がかうらしいですね。このほか、月一回の国立名人会、花形演芸会や、毎年恒例の夏休み企画「親子で楽しむ演芸会」なども人気があります。一階の資料展示室では、演芸に関する企画展を無料開催していることもあります。

<http://www.nfjajac.go.jp/engei.html>

◆伝統芸能情報館

古典芸能の情報発信基地として、二〇〇三（平成一五）年に国立劇場敷地内に設置された施設。情報展示室、図書閲覧室、レクチャールームを備え、企画展や伝統芸能サロン、公演記録鑑賞会などを無料で開催しています。ウェブサイトの「文化デジタルライブラリー」は、使い勝手もよく、古典芸能について調べ際のツールとしてすぐれています。

<http://www.nfjajac.go.jp/tradition.html>

写真提供／日本芸術文化振興会



伝統芸能情報館

明治より歌舞伎とともに歴史を刻む殿堂
歌舞伎座（東銀座）



写真上：第五期歌舞伎座 写真下：第四期歌舞伎座

二〇一〇（平成二二）年の閉場から三年の時を経て、今年四月に開場した新生歌舞伎座。銀座における歌舞伎座の歴史は古く、初代が誕生したのは一八八九（明治二二）年のこと。その後、火災や震災、戦禍に見舞われて焼失しますが、そのたびに復活を遂げ、現在の劇場で五代めとなります。

第五期歌舞伎座の特徴は、威風堂々とした桃山風の劇場と、その背後にそびえる地下四階・地上二九階の高層ビルからなる複合施設である点です。今回、設計を担当した建築家・隈研吾氏は、伝統とモダンの融合に最も気を配ったといいます。写真上段が、一二五年の歴史と伝統を継承しつつ、百年先を見すえ、

安全や環境面にも配慮したという「GINZA KABUKIZA」。下段は六〇年にわたって歌舞伎ファンに愛された第四期歌舞伎座です。ご覧のように、第五期の劇場部分の意匠は、第四期の面影を色濃く残しています。長く銀座のランドマークとして親しまれた第四期歌舞伎座を懐かしみながら、新しく生まれ変わった「GINZA KABUKIZA」界隈を歩いてみるのも楽しいものです。

左は第五期歌舞伎座の舞台写真です。歌舞伎専用の劇場らしく、舞台下手から客席に伸びた花道が見えます。舞台と花道の床に見える黒っぽい長方形は、「迫り」と呼ばれる昇降装置。この装置は、大道具を上げ下げしたり、役者の登場・退場をより効果的に演出したりするために使われます。一階から



舞台／第五期歌舞伎座

三階までの客席は一八〇八、四階の一幕見席九六、立見六〇。手ごろな価格で、見たい幕だけを気軽に見られる一幕見席は、初心者にお勧めの席です。
新装なった歌舞伎座には、実はチ

ケットがなくても楽しめるスポットがあります。東京メトロ・東銀座駅と直結した地下二階は、売店や飲食店が立ち並ぶ広場。歌舞伎座の座紋である鳳凰の大提灯に迎えられて歩を進めると、そこはまるでにぎやかな祭りの一場面のように。観劇のついでに立ち寄った人や観光客で活気づく広場は、そこにいるだけで日常とは違うハレの気分にはさせてくれます。この広場では、なんと自動販売機まで歌舞伎仕様です。黒・柿・萌黄の定式幕をまとった販売機を見ると、思わず頬が緩みます。

休演日にも開場している五階フロアには、歌舞伎座ギャラリーと屋上庭園があります。ギャラリーの展示スペースでは、季節に応じたテーマで企画展を開催しています。「歌舞伎の美 春」歌舞伎の夏 色彩と音」に続き、九月一二日からは秋期企画展が始まる予定です。入場料は、小学生以上五〇〇円。歌舞伎座屋上に造られた回遊式日本庭園もまた、ぜひ訪れたい場所の一つ。こちらは入場無料で都会のオアシスを散策できます。

四月二日に「柿葺落四月大歌舞伎」の初日が開幕した歌舞伎座では、来春までこけら落とし公演が続きます。九月一〜二五日は「九月花形歌舞伎」を上演中です。

<http://www.shochiku.co.jp/play/kabukiza/>
写真提供／松竹株式会社

開場三〇周年を迎えた能楽専用の劇場 国立能楽堂（千駄ヶ谷）

JR千駄ヶ谷駅付近は、東京体育館、国立競技場、神宮球場などのスポーツ施設が集まり、新宿御苑も隣接する緑豊かなエリア。また、近くに日本将棋連盟の本部が入った将棋会館があることから、駅のホームには大山康晴十五世名人の筆による「王将」駒の石碑を見ることが出来ます。

駅を出て、都道四一四号線を西に三〇〇メートルほど直進し、左手に日本風の門と美しく整えられた前庭が見えたら、そこがお目あての国立能楽堂の入り口です。

国立能楽堂は、一九八三（昭和五八）年に能楽の普及と発展、後継者の育成を目的に設立された能楽専用の劇場。室町時代から六〇〇年以上にわたって演じ継がれてきた舞台芸術であり、能および狂言を鑑賞することが出来ます。玄関広間や食堂には中庭から明るい光がさし込み、木材をふんだんに用いた内装に心が和みます。



国立能楽堂



国立能楽堂能舞台

客席と能舞台の間に緞帳はなく、四本の柱で支えられた屋根付きの舞台は、三方吹き抜け、正面奥の鏡板に松の絵が描かれていきます。下手に「橋掛り」と呼ばれる通路があるのも能舞台の特徴です。檜づくりの舞台からは荘厳さと優美さが漂います。あたかも見る者を日常の喧騒から解き放ち、幽玄の世界へと誘うようです。

今年開場三〇周年を迎える国立能楽堂では、四月から来年一月まで、さまざまな記念公演を上演中です。開場月の九月に「翁」を口開けに開場記念公演を四日間にわたり上演するほか、一一月には能「道成寺」、一二月には狂言「釣狐」といった大曲がひかえており、能楽ファンにとってはなんとも楽しみなラインアップとなっています。

通常の公演や記念公演のほか、手ごろな価格で見られる鑑賞教室や、夏休み恒例の親子企画などがあります。興味のあるかたは、ウェブサイトで情報収集するとよいでしょう。

<http://www.ntj.ac.jp/nou.html>
写真提供／日本芸術文化振興会

一五〇余年の歴史を誇る寄席 鈴木演芸場（上野）

東京メトロ・上野広小路駅。若者や外国人観光客が行き交う秋葉原を背に中央通りを北へ進むと、ほどなく左手に、のぼりと名入れ提灯がにぎやかな建物が現れます。入り口あたり、独特の寄席文字で書かれた出演者の木札を見ると、なんとなく心がそわそわ。

ここ鈴木演芸場は、東京に四席ある定席（常設の寄席）のうち、最も古い寄席です。創業は一八五七（安政四）年、「軍談席本牧亭」がその母体といわれています。明治に入り、席亭の「鈴木」姓と「本牧亭」から一字ずつを取って、「鈴木」の名称になりました。一九七一（昭和四六）年、現在のビルが完成し、ビルの中の寄席として営業スタート。長いエスカレーターを上った先の三階に客席があり、二八五ある座席はすべて椅子席です。聞きやすい、見やすい寄席として好評を得て

います。

番組は、伝統話芸の落語を中心に、漫才、曲芸、紙切り、奇術などバラエティに富んだ内容になっています。一か月を上席、中席、下席の三つに分け、十日ごとに出演者と演目が入れ替わります。昼夜二部構成の昼の部は午後〇時三〇分から、夜の部は午後五時三〇分から。当日券は、一般二八〇〇円、小学生一五〇〇円。学校向けの特別プログラムによる貸切公演にも応じています。

<http://www.rakugo.or.jp/>

写真提供／鈴木演芸場

レトロな木造建築が江戸の雰囲気伝える 末廣亭（新宿）

大型百貨店やファッションビルが軒を連ねる新宿三丁目には、東京の一大ショッピングエリア。交通量の多い新宿通りと明治通りが交差する一角に、まるで江戸時代の芝居小屋のような風情の木造建築があります。一九四六

（昭和二一）年創業の老舗寄席、末廣亭です。

現在の建物は、終戦直後に初代席亭によって建てられたもの。のぼりに大看板、提灯、木札などに迎えられて木戸をくぐると、そこには江戸の庶民の笑いが広がっています。一階の中央には一一七



末廣亭

の椅子席、椅子席をはさんで左右に三八ずつの棧敷席があり、二階には一二〇の棧敷席があります。

一回の公演につき一八組ほどの出演者が登場し、そのうち落語は一一組ほど。ほかにも漫才、奇術、曲芸、俗曲などの第一人者がそれぞれの芸を披露します。上席、中席、下席で十日ごとに出演者と演目が入れ替わるシステムは、鈴木演芸場に同じです。昼夜二部構成の昼の部は午後〇時から、夜の部は午後五時から。当日券は、一般二八〇〇円、小学生一八〇〇円。学校寄席（芸能鑑賞教室）などの貸切公演にも応じています。公演時間、料金等の相談は〇三・三三三・五一一・二九七四まで。
<http://www.suehirotei.com/>
写真提供／末廣亭
※記事中有る公演・料金等の情報は、すべて二〇一三年八月末現在のものです。詳しくは直接お問い合わせください。

鈴木演芸場



穂先の通り道が
ひと目でわかる

二色筆の作り方

はじめに

薄墨の先に朱墨がついた「二色筆」で書いた文字は、穂先の通り道がひと目でわかるため、書写指導においてよく用いられています。毛筆入門期の筆使い指導から高学年の穂先の動きと点画のつながりの指導まで、効果的に活用することができる。「二色筆」の作り方について、ポイントをご紹介します。

用意するもの

- ・ 水を入れた
ペットボトル
- ・ 筆
- ・ 墨液（黒色、朱色）
- ・ 半紙またはコート紙



① 薄墨を作る

ペットボトルに水を入れて、その中に墨がついた筆を入れる。墨が濃くなりすぎないように、加減しながら筆に薄墨を含ませる。



墨が薄すぎると字形全体が見えにくく、濃すぎると、朱墨をつけた時に目だたなくなるので注意する。



● 濃すぎる例



● ちょうどよい濃度の例

② 朱墨をつける

① の薄墨をつけた筆先に、朱墨を少しつける。



③ 試し書きをする

朱墨が上にくるよう意識しながら、半紙に書いてみる。コート紙に書くと、筆使いがよりはっきりとわかる。



●コート紙



●半紙



●穂先の通り道が左側を通っていることがわかる。



●穂先の通り道が変わる文字の指導にも効果的。



「谷」という漢字から見いだせること

笹原 宏之

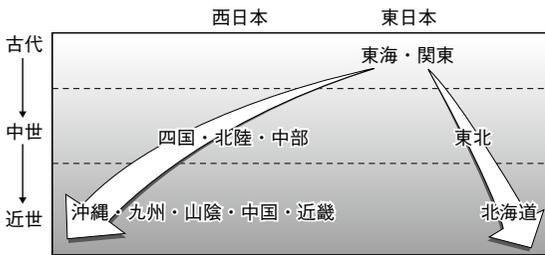
早稲田大学

社会科学総合学院教授

小学二年生で習う漢字の「谷」の訓読みは、「たに」である（「コク」は音読み）。山がちで起伏に富む日本列島には、大小さまざまな谷があり、地域に密着した地形として土地や人の名にもなった。土地ごとに方言で呼ばれたため、いろいろな読み方が生じ、例えば「大谷」には「おおたに」のほかに、国語の時間には教わらない「おおや」もある。「谷津」「谷地」「谷戸」となると「やつ」「やち」「やと」、さらに一字で「はざま」や「さく」などの読みに触れることもあるだろう。

西日本では古くから「たに」と読まれた。一方、東日本では地名としては「や」と読まれたことが奈良時代の文献からわかっている。「や」はもともと関東辺りの方言だったのである。「渋谷」も、京都や大阪の地名では「しぶたに」であり、野球選手が輩出する高校名や関ジャニ∞で知られる名字にもなっている。それに対して都内の繁華街の地名としては「しぶや」で、駅名にもなっている。渋谷駅は低い土地にある。

この「や」を通してみると、古代の関東・東海の方言形が、下図のように時代とともにその東と西の地へ影響を与え、特に西の「たに」という地にその領域を伸ばしていった様子がうかがえる。中世に、若狭（福井県）に武士の熊谷（くまがや・くまがえ・くまがい）氏が現れるなど、人の動きが各地の訓読みに影響を及ぼした。



「谷」を「や」と読ませる地名の広まり方

逆に西からは「たに」系の読みが東日本に広まり、次第に標準語的な位置を占めていった。固有名詞として互いの地で読みの使用が混ざったのである。都内でも、「たに」（だに）と読ませる「鶯谷」「茗荷谷」などありはするが、江戸時代以降に付けられた新しい地名である。小著『方言漢字』に示したとおり、現在、「たに」ないし「や」という読みが過半数を占める状況は富山・新潟、岐阜・長野、三重・愛知で、東西にきれいに分かれている。ただ地名や名字での混ざり方にも地域によって濃淡があり、その境目にある東海、北陸地方では二つの読みが拮抗している。

このように日本では、谷のようになった地形を各地で「たに」「や」などと呼び、それらの同義・類義語に「谷」が当てられ、地域色豊かな訓読みとなった。

中国でも漢字は、読みは各地の発音に任せ、意味だけを共有できればよかった。その後、逆に中国では、表音機能を重視した漢字使用が目だつようになる。文字の標準化を強く促進する中で、「穀物」は正式に「谷物」と書くように定められた。画数の少ない同音の字を簡体字と決めたためだ。「谷」には、漢字を単純化させ表音的に使う傾向をもつ中国と、漢字の読み方などを多様化させ表音的に使おうとする日本とで、好対照な運用を見ることができるのである。

ささはら ひろゆき 一九六五年東京生まれ。博士（文学）。経済産業省の「JIS漢字」、法務省の「人名用漢字」、文部科学省の「常用漢字」などの制定・改定に携わる。著書に『日本の漢字』（岩波新書）、『国字の位相と展開』（三省堂、第三五回金田一京助博士記念賞受賞）、『方言漢字』（角川選書）などがある。



板書に自信がもてない、
そんな先生はいませんか？

バランスのよい文字が書けない……
文字の大きさがばらばらだ……
書くのに時間がかかる……
どうしても行が曲がってしまう……

そんな板書の悩みを解決する
15の板書技術を公開します！

目次

第I章 板書の機能・板書の日常化

- 1 板書がなぜ求められるのか
- 2 板書の機能を授業で生かす
- 3 教員養成における板書技術の指導
- 4 新たな板書の果たす役割
- 5 児童・生徒の板書に対する期待
- 6 大学生の板書に対する期待

第II章 読みやすい文字を書く

- 技術1 漢字を書くコツ
- 技術2 ひらがなを書くコツ
- 技術3 カタカナを書くコツ

第III章 板書の基礎・基本

- 技術4 チョークの持ち方
- 技術5 教師の立つ位置
- 技術6 行取りの工夫
- 技術7 文字の大きさ
- 技術8 曲がらないコツ
- 技術9 色チョークの使い方

第IV章 授業をグレイドアップするための技術

- 技術10 速く書くコツ
- 技術11 黒板の広さを理解して書く
- 技術12 児童に書かせるコツ
- 技術13 横書きのコツ
- 技術14 板書計画に合わせて書く
- 技術15 練習の日常化

プロの板書

鈞持 勉 著

ISBN978-4-316-80375-3

B5判 100ページ/本体 1,400円+税



第11回

まもなく締め切り!!

地球となかよしメッセージ

作品募集(2013年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。



応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!



第10
回入選
作品

信友

運動会で私たち6年は、組体操をやりました。
その中の2人技、「サボテン」は雨のせいでグラウンド
がベチョベチョだったので、やりにくく失敗する人たちが
たくさんいました。
私の場所もやりにくく、上の子が「もう落としていい
よ。」と言ってくれましたが、小学校生活最後の運動会だっ
たので、絶対成功させたくて、「大丈夫。まかせて!」と
言うと、上の子は「分かった。」と言ってくれました。
その言葉がとてうれしくてうれしくてたまりません
でした。まるで、「信じてる。」と言ってくれているよう
でした。
そのしゅん間、「サボテン」は成功しました。

応募資格 小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

応募期間 2013年7月1日～9月30日
詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

**作品
テーマ**

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

小学国語通信 ことばだより [2013年 秋号] 2013年8月30日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局 発行: 教育出版株式会社 代表者: 小林一光

印刷: 大日本印刷株式会社

発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社

〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509

函館営業所

〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198

東北支社

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395

中部支社

〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825

関西支社

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401

中国支社

〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040

四国支社

〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134

九州支社

〒812-0007 福岡市博多区東比恵 2-11-30 クレセント東福岡 E 室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140

沖縄営業所

〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411